

東山

畫堂

化  
於  
中  
大

林  
子  
良

# 高陽閣飲序

樂山

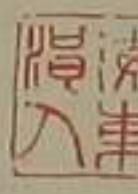
品畫

于壽驛中六亭主人今  
年六十於是閏初度  
之宴為闌飲之會乃先  
期莊招單大集都下  
田間一飯客如粧花俗言波  
利上戶  
病葉俗言朴武酒悲俗言柰起  
津上戶  
徵鳴官馬俗言利久之類則  
既斷之卜吉之日相會者  
凡一百餘人皆一時之海量  
也各、左右分隊相坐每  
方一人升席左右二人相對  
而舉自焉乃三觴政置錄  
事而督之嬌女二人侍  
其側而給仕焉皆柳櫟二  
名妓也一人捧盃而進舍  
其前二人各執注子左  
右注之其酒則所謂玉  
綠即伊丹之上釀其羹  
則鯉魚即綾瀨之新鮮

名妓也一人捧盃而進舍  
其前二人各執注子左  
右注之其酒則以謂玉  
綠而伊丹之上陳其羹  
則鯉魚而凌漪之新鮮  
也有核雞陳種之不其  
孟則描金雕鑄實布  
世之珍也自五升而登之  
或七升或耳或一斗二升  
或三斗乃至大而已或有  
一口吸盡者或有數口而  
竭者大小之鑊盞一  
傾其筭者是為第一  
名焉其餘則次之為差  
各簿錄以課甲乙輸  
之羸其籌不滿斗者不  
在此數如各三雙于捧  
盃引滿連飲不餘一滴  
實如長鲸吸百川矣觀  
者皆吐舌坐密喝采不已  
至飲畢衆莫有多言  
喧譁皆致禮辭謝而  
歸余之酒人也雖然吾  
自知其量之不敢退避  
其隱在傍而觀之乃歎云  
古人謂酒有別腸者如

歸余之酒人也雖然吾  
自知其量之不敵退避  
其隊在傍而觀之乃歎  
古人謂酒有別賜猶如  
今日之人者邪未張  
安道劉潛石曼卿御史  
對飲而不別輸贏既而  
王漸自下道士闢飲而  
定甲乙水蓮道人輯酒  
顛無懷山人著酒吏以  
述其事為太平之盛  
事不亦宜乎嗚呼主  
人壽已六十而又自祝此  
太平之國幸則主人之  
先其有天之義祿<sub>者</sub>半  
時文化十二年歲在  
乙未冬十月廿一日  
也

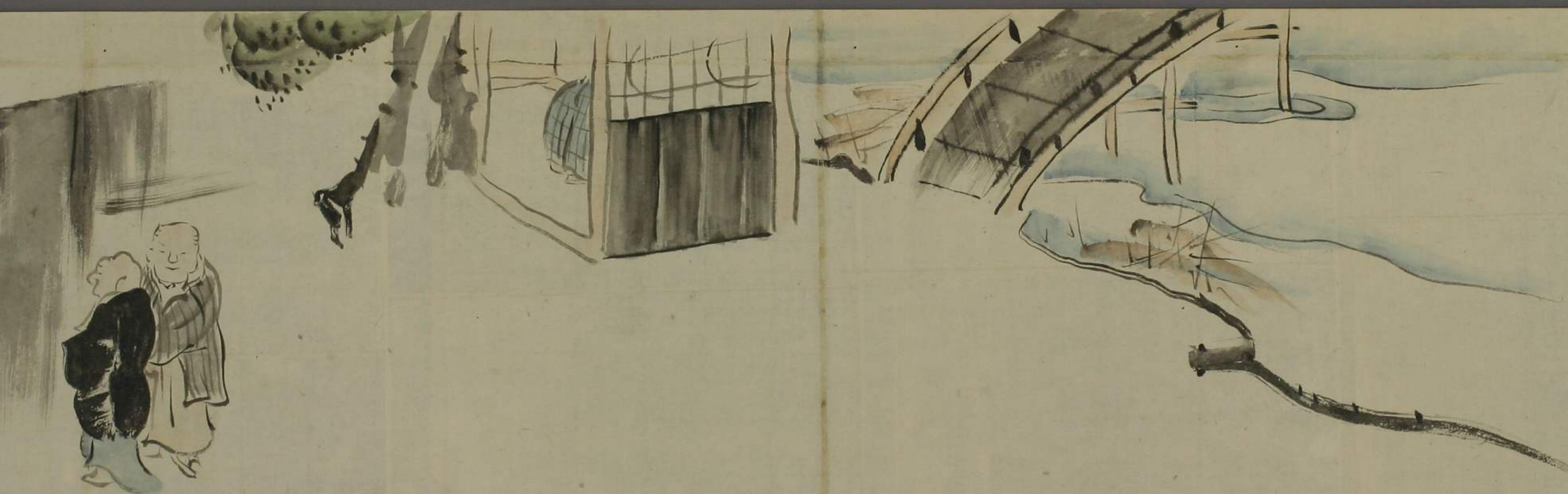
關東鵬齋老丈與  
稚龍文撫



關東鵬齋老丈興  
稚龍父畫

詒興

晴東



卷之二

支那の事  
日本  
の事



卷之二

文代ナニの事すまめ自也  
此の御子住の事中之に之  
酒今致の事あつて門ノ一の時  
アリ

ふせんを下す  
理窟入庵の事なる  
人あるゆゑてあるが酒量と切合  
りて体であるあくまへ酒能の  
事あるじ白あくまはたれど  
せ

紅鴟盃 七分一 離合盃 十分一  
官鴟盃 一升八 福壽如意盃 二升六  
丹頂鶴盃 三升八

あはるひの四人酌みて酒を以言慶  
うきよのまじと十二ふうとや道えみ奉  
あはるひのまじて時より通勤新すれ  
ウリ秋葉よ堂いこむ一睡して家す  
ぬきく大長とくくく四升あると度て  
木きづくに醉引くの次のまじ辰の日  
起くみゆく一升あると仰けりまほの

一  
家にゆきも拂邪宿ひまつる。





太陽へいづる。おまかせする。母娘の

母娘の

つるみもつるみと仰す。まん一途の道で  
ありまつて、西舞もとて、船著る門のま

まつて、おまかせする。まつて、金津川

船人河田行く。この舟がとどきて、旅籠の

あつて、まき推進せよとまつて、席籠の

のまつて、行船済食す。まつて、宿食をす。

まつて、船のままで、五度とくは、あを西やの

か船せよ。まつて、五度とくは、あを西やの

一度のんと解て、まつて、あを西やの

いふうとき不用ありて、あを西やの

まわせ力で、まつて、あを西や用あり。今蓋

つて、まつて、おとす。まつて、おとす。

まつて、まつて、おとす。まつて、おとす。

二世下族東側。まつて、廻る。二の

大原河原坂上ちゆる。底流。大坂。

まつて、せき場。まつて、まつて、まつて、

まつて、まつて、まつて、まつて、まつて、

大原自れ古佛。まつて、まつて、まつて、

まつて、まつて、まつて、まつて、まつて、

この、この、この、この、この、この、

古佛。まつて、まつて、まつて、まつて、

まつて、まつて、まつて、まつて、まつて、

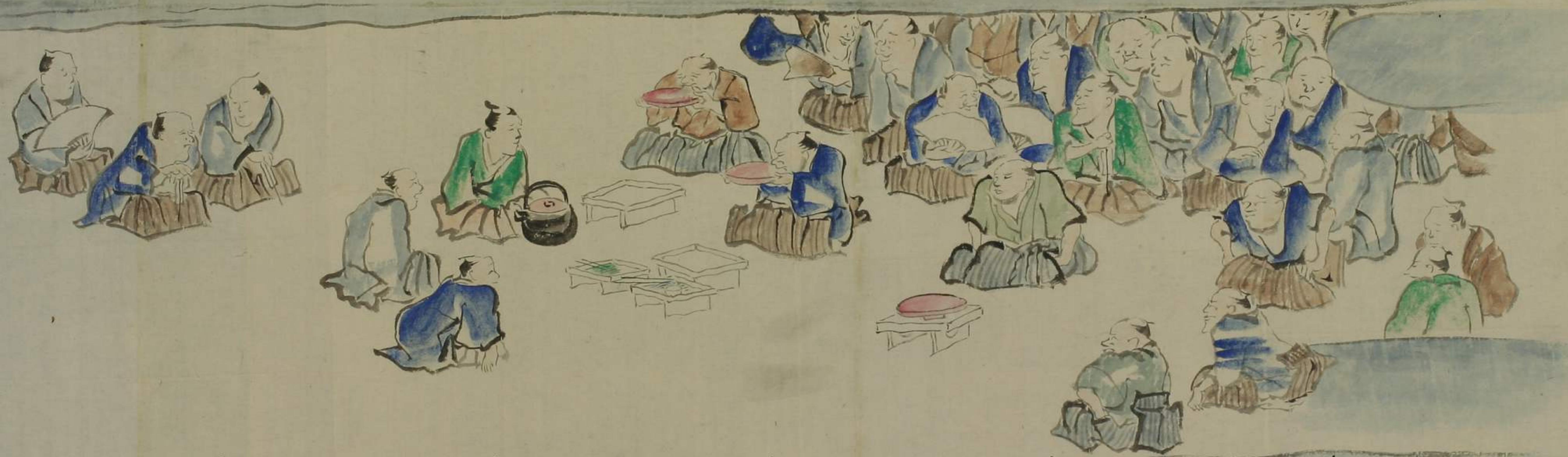


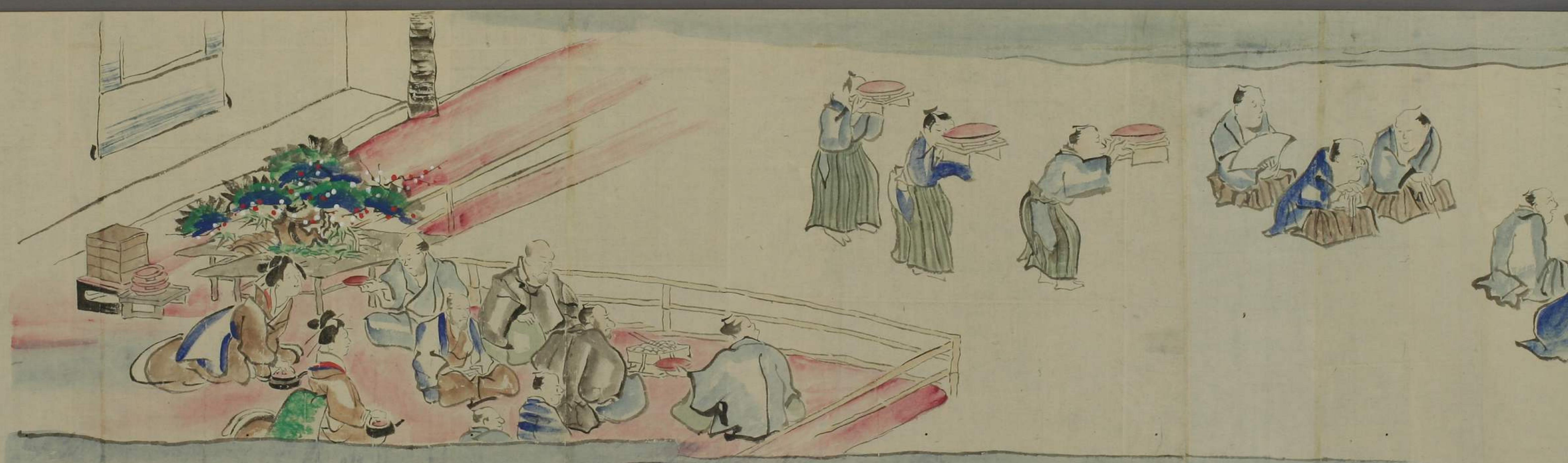
あらまわすみやうす  
金玉すへんすれあらまわす  
かく代のまよとあらまわす  
かのよみがはり亭子院の通す  
おとこてき進む事す  
人  
情を破け  
門かに假卦  
伊衛一人め駿馬  
あんかふい朝はい美す  
あらまわす草跡の奇跡  
あらまわすののうす  
ひるみ荷はす  
一  
此一小をも  
さるを  
絹本  
絹本  
六十人  
人

六十七翁蜀人

綿舟樓

丁巳











王維詩卷



王氏  
卷之三

酒載場中勦渴  
兵東西排列若  
第名也如霞酒  
有飲以至人接  
漁鱣時人平  
車隆於  
醉鄉見我爭  
鴛鴦杯鷓鴣杓  
酒斟來誰  
飲將此酒軍  
有所向乞凌天  
心甘然殊幸  
我亦忘家計  
乞乞因天嘗

題酒載圖

詩仲和人大音行

饭将少渴军

有所向宣言天

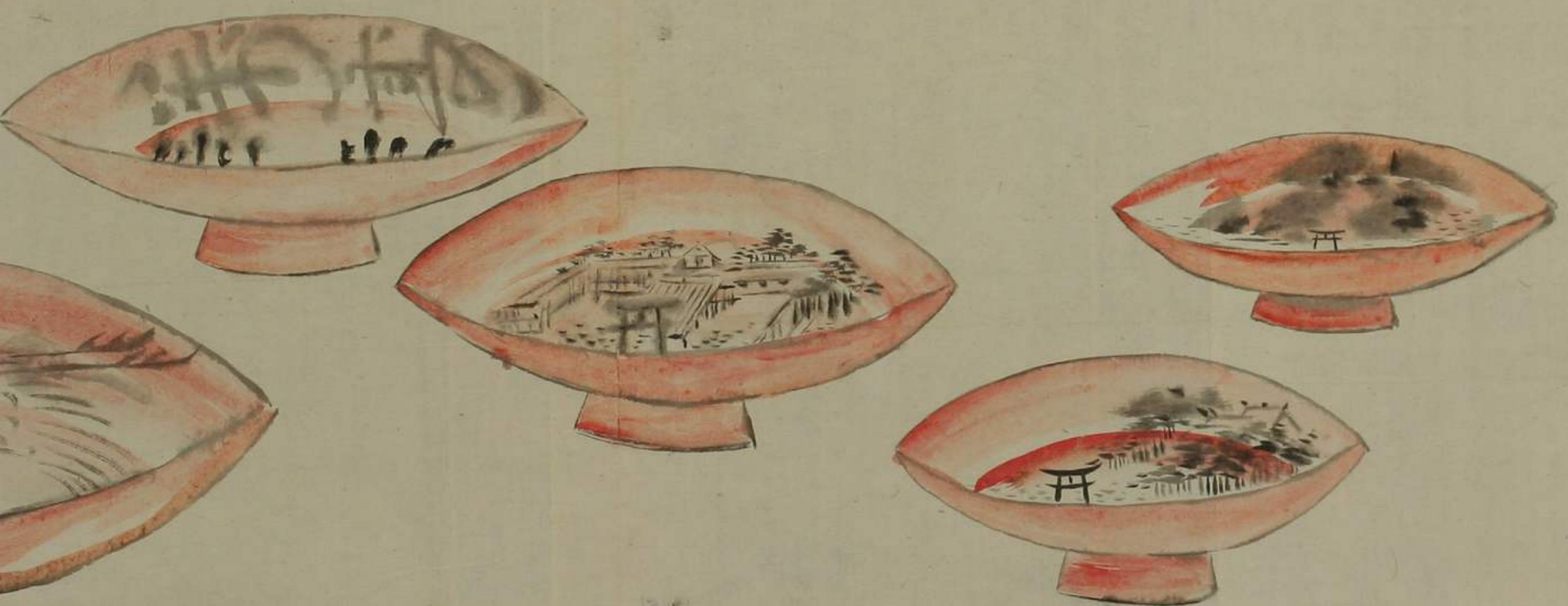
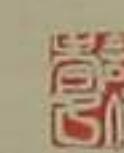
心甘然殊生矣

我与君安乐相邱

忘名固无苦

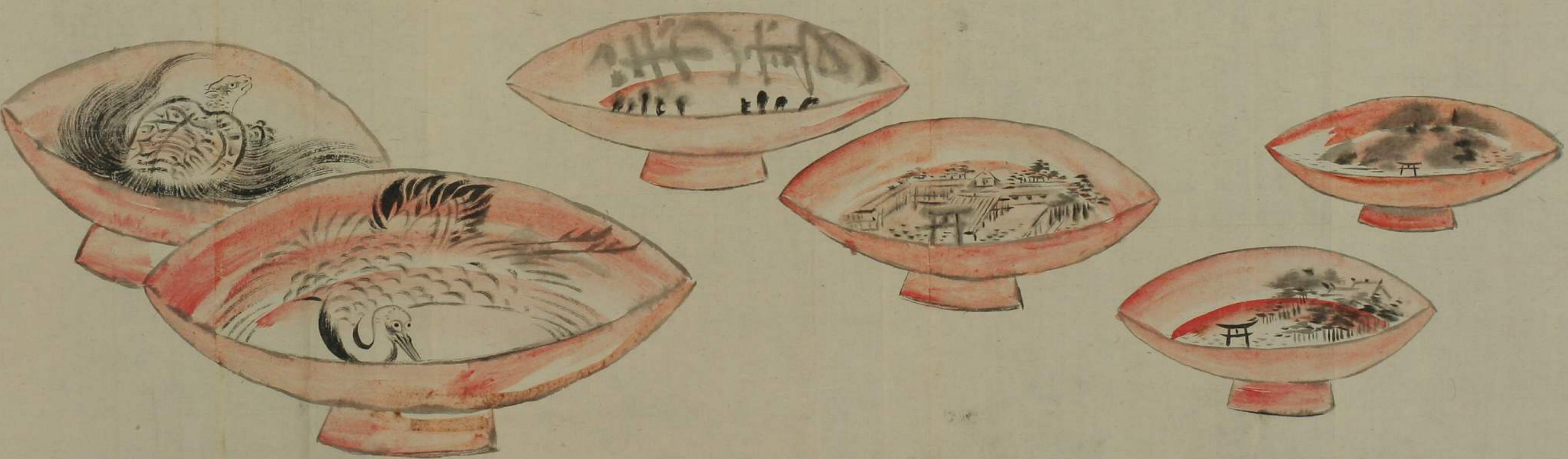
醉酒歌图

诗翁志人大作行



癸卯年余生時陽歲月

群錦秦川藤原彰信畫



醉錄卷之藤原彰信草



予年余至瀟陽屬邑有酒  
劇景猶江芸客萃飲不能飲  
其酒而不能飲者固固叩其  
說乃云苦醇釀而頭痛美試  
味其所齎紹興酒者甚清而  
帶酸微玉數十毫以能而  
嘲紅已固是觀之八傑飲半  
三市上飯五斗者也其  
易之已淡半牛半方復居以  
酒發圈空乞酒底南取破壳  
記之鵝局局人席之悉其如食  
小戶主復門言峰記半身之  
唐家飲事而因之鳴呼仗此  
酒兵車徒十乘相虧千余  
海上則其種之碑馬而昂  
者不僅三人也已

乙亥嘉年月寃高寧題

時年六十七



